フィリピン国パナイ島カピス州のアグロフォレストリープロジェクトに参加して

松　田　吉　正

はじめに

島の名“パナイ”とは，“豊かな”と言う意味を持ち，かつては隣りのネグロス島と共にサトウキビ農業で栄え，文化の拠点としてのイロイロ市があります。島の大きさは四国の3/4程です。近年，島の東北部のカピス州を中心に，沿岸のマングローブ林は日本向けのエビ（タイガーシュリンプ）養殖による著しい開発が行われています。風鈴，シャンデリア，ランプシェード等のインテリア素材カピス貝は，このカピスの浜に産するものです。

私はそのカピス州庁の発足当初のアグロフォレストリープロジェクトで，青年海外協力隊員として2年間植林の指導にあたりました。

プロジェクトは，州の中央部クアルテーロ地区ナグバ村のサトウキビ廃園14 haに設けられました。小粒ながら他の州からの研修生も受け入れ，トレーニングを通じながら永続性のある農法を提示し，かつ地域農家への苗木の供給基地をも兼ね備えることが望まれました。

有用樹・作物の導入とAフレーム

“パナイ”とは裏腹に，見わたす丘陵地は永年のサトウキビ農業のために地力は収奪され，コゴングラスがおい茂っています。見渡しは大変よいのですが，プロジェクトを運営するのにpH 4.0〜4.5の重粘質土壌が関門となりました。まずこれ以上の表土の流失を防ぐために，傾斜地に水平の溝を掘り，その部分の盛り土を早期緑化することから着手しました。当初はイピルイピルの種子を密にまき，ちょうどお茶畑の様なテラスを作成することをもくろみましたが，カラバオ（水牛）の侵入と，酸性土壌のため全く生育しませんでした。後に，バンブーのさし木及びアカシアの苗により形がつきました。

それにしても，でこぼこしたいびつな斜面に水平な線を引くことは難事のことのようですが，現地にはそれに対する適合技術が普及していました。

アルファベットのAの形をした木製またはバンブー製のフレームを用いるのです。

MATSUDA, Yoshimasa : Participating in a Agroforestry Project in Capiz Province, Panay Is., the Philippines
(元)青年海外協力隊

写真-1　A フレーム

A の頂点より重し（石でも可）をつけた糸を垂らし，その糸がたえず A フレームの横棒の中央の目じるしの所に来る様にして，コンパスの様に歩かせます。フレームの足の接地した所に，棒をさして行き，後にカラバオもしくは人力により溝を掘り進んで行きます。実に簡単な道具ですが，とても正確かつ能率も良いものでした。

こうして造成されたテラスには，各々パイナップル，バナナ，牧草，陸稲，豆類，ゴマ等が植えられて行きました。しかしそれらは生存するにとどまり，生産する段階には至りませんでした。

共栄作物と土づくり

樹木混植を骨格とするアグロフォレストリーにおいて，作物間の相性を見極め，組み合わせ生産を向上する技は大切なことです。現地においても，いろいろな作物のコンビネーションが試みられました。しかし，これは単一作物が十分生産される技術とそれを支える地力があってのことです。単作が満足にできないところにいきなり複合植栽に入るのは，下手をすれば共栄作物の有効性をも疑わしいものにしかねません。だからと言って「土づくりが第一」などと正論を言ったところで，現地では無いものねだりにしか写りません。化学肥料を購入する資金は無く，付近に有機農法の堆肥となる材料は少ないのです。何としても早期緑化木，肥料木を育てあげないことには次のステップに移れませんでした。

バヤニハンハウス

フィリピンでは，村のことをバランガイ（船の意）と言います。村長はバランガイキャプテンと称します。村のだれもが大工仕事に優れています。海洋民族の誇りがうかがえます。村々では田植え，収穫，土木工事等は一族の協同作業で行われ，これをバヤニハンと呼びます。日本のユイにあたりましょう。

当プロジェクトもバランガイキャプテン指揮のもと，青年有志，ボーイスカウト等のバヤニハンに，ポット苗造り下草刈り等様々な作業を助けられました。炎天下の作業ではチュバ（ヤシ酒）のまわし呑みが行われたり，昼食も皆で持ち寄った材料を協同で調理し，なごやかにバヤニハンは行われます。

私も着任一年後，協力隊員支援経費制度をあおぎ，このプロジェクトサイトの丘の上に大きなキッチンを建造しました。デザインはバランガイ（船）をイメージしたものとしました。12 フィート×24 フィートの大きさです。

メインは火力です。1 連 3 火口のストーブを二基つくりました。1 基は木材，バンブーのチップ，もう 1 基はモミガラを燃料とするものです。燃焼室，煙突にゆとりをもうけ，中華料理も可能な火力を得ることができました。調理後，灰はアブラムシ退

治に，モミガラクン炭は土壌改良材料に利用しました。

付近はバンブーが良く自生しており，良質の川砂も入手できましたので，雨水タンク（7，000 l），ながし，フロアーは，竹筋（チツキン）コンクリートとしました。

写真-2 建造したキッチン――壁は竹製で，船用のペンキで塗装した

こうしてバヤニハンのみならず日常の食卓のふんい気もなんとなくリッチとなり，調理を通して効率と衛生を考えることにもつながってゆきました。バヤニハンハウスの愛称をもらい，村の一種の社交場にもなりました。総工費は US 1,500 ドルでした。

隣接して苗床をもうけ，管理しました。煙は当らぬよう注意を払いました。科学的データはありませんが，生育は他の場所よりも一段と良好になった様です。

パラダイス

サトウキビ精製工場は今やほとんど操業を中止しているのですが，時に思い出した様に開業します。すると村々では，巡回して来る工場の薪収集トラックのために，1 m^3 500 円程の低価格にもかかわらず，男たちは河川ぞいにわずかに残った木々の伐倒にかかります。サトウキビ農業は土地を台無しにしたばかりか，人々の心も崩壊させてしまった面が見られます。サトウキビさえ作っていれば，大地主のもとでなんとか生活は送れた時代があり，細密な農業暦を不要としてしまいました。

そんな中でも，土地の古老は家のまわりにめぐらしたバンブー林の手入れに余念がありません。低地の方ではここ 2〜3 年の間に，水の引ける所はほとんど水田に変換されてきています。誰が指導するわけでもありません。当方が森林の効用を説くのとは別に，人々は生きて行くのに精一ぱいなのでした。

カピス州知事コルネリオ・ビラレリアル氏は，農林開発のみならず，低価格住宅そして雨水貯水タンクなどの普及にも大変熱心であり，このアグロフォレストリープロジェクトも広い視点で運営することができました。当プロジェクトでは，他の州からもエンジニアを招いてしばしば 1〜2 週間のトレーニングを行ないました。A フレーム利用に始まる傾斜地の有効利用，貯水タンク造り，家畜育種と様々なメニューに，多くの参加者を得ました。もちろん地元参加者への影響も大きく，資金にややゆとりのある農家が中心となりコーヒー苗の生産が始まり，簡単な組合活動も生まれてきました。

プロジェクトの苗畑では，早期緑化木としてアカシア，ユーカリ類の苗 17 種ほど約 1 万ポットを育て，植栽しました。地元の小学校ボーイスカウトの記念事業に，記念植樹として寄付したりもしました。カシューナッツ，オレンジ類，コショー，パッ

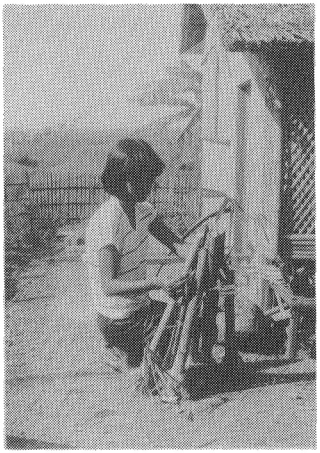

写真-3 竹の苗――地上部を適当に切ってさすと，節のところから容易に発根する。竹は重要な生活資材で，住居建築（壁，床等），日用品（かご，ざる，ほうき，敷物等），漁業の定置網支柱等広い用途がある

ションフルーツ，ショウガ（ハワイアン）などの苗も混植してまいりました。地元古老の指導で，バンブーのさし木植栽も行いました。

とてもすぐに用材生産，輸出作物生産が期待できると言うものではありません。この国この地域の経済の立て直しは，容易なことではありません。ただバヤニハンと言う村の団結心，誇りを打ち鳴らしつつ，明日への生活に少しでも希望が持てることを祈っただけのことです。わずか2年間の協力活動ではありましたが，村の人々の好意に甘えながらも，小さなパラダイスの土台は完成しました。

アグロフォレストリーは，その地域，地域で環境に応じ異なった発展をするもので，定義づけはむずかしいものです。畜類（豚，水牛，牛，鶏，あひる等）を飼い，魚類（テラピア）を導入し，野菜つくりをしていきますと，植林と農業，畜産とのけじめもなくなってしまう感がありました。文字通り“ある種の，グロテスクな，フォレストリー”を作っただけなのかも知れません。とても分野の広いことから逃げ道もたくさんありますが，植林事業とは何なのかを基本に帰って学ばせてくれるチャンスでもありました。

海外林業研究会事務局よりお知らせ

1. 異動通知について

事務局としては頒布物の送付を確実に行う等のため，会員の異動については先に作成した名簿を活用しつつ適切な把握に努めていますが，なお，異動があった場合には会員各位より御一報願います。

2. 名簿の訂正　21頁の下から2行目に誤りがありましたので訂正をお願いします。

（誤）和　公彦　　（正）林　公彦

3. 会費納入のお願い

研究会々費は年額3,000円です。昭和62年度未納の方は6,000円を，同封の振替用紙で海外林業研究会，振替口座：東京 8-91412　に成可く早くお払い込み下さい。